
青空の世界～SKY OF AZURE～

金地院崇伝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空の世界／SKY OF AZURE／

【Nコード】

N0518B

【作者名】

金地院崇伝

【あらすじ】

アースヘル：そこは人間と亜人が共存する世界。アースヘルに『空』というものはなく、人々もそれが当たり前だと思って生活している。この物語は、そんな世界の中を一人の男とその仲間たちが希望を求めて戦う、壮大な冒険活劇の記録である

プロローグ（前書き）

初投稿です、かなりの長編になりましたが、最後まで読んでいただけたならこれ幸いです

プロローグ

我々の世界が誕生するはるか昔、人間はここではない、別の世界に生きていた

世界の名をアースヘヴン

そこには『空』と呼ばれた青く広がる天があり、その中に太陽という光り輝く熱の塊が、燦然と大地を照らしていたのである

人々はその下で発達した文明を築き、日々の生活を営んでいた。

ところがある日、どこからともなく現れた魔王デイドゥクレアルの手によって突如として世界は滅びてしまった。

デイドゥクレアルの手は一挙にして世界を包み、アースヘヴンはまたたくまに深淵の暗闇に陥った。

あれだけ輝いていたはずの太陽は空から掻き消え、代わりに漆黒の闇だけが天を不気味に彩る。

人々は絶望した…大地は荒廃し、それを映し出すように人々の心も病んでいった、アースヘヴンは完全にデイドゥクレアルに掌握されてしまったかのように思われた…

しかし、人々の前に突然現れた七つの光が、次々と闇に飲まれてゆく世界の中、デイドゥクレアルに立ち向かっていったのである。

人々はその七つの光を敬意と畏怖の念を込めてこう呼んだ…

セブンスホープ…七つの希望、と

七つの希望はディードⅡクレアルと長きに渡り、激しい戦いを繰り広げ、ついにはディードⅡクレアルをおいつめた

だがしかし、ディードⅡクレアルは最後の力を振り絞り、七つの希望を自らの体内に取り込むことで封印し、自らも傷を癒すために永い眠りに入った

それから数千年の期間は無の世紀と称されることになる、ディードⅡクレアルは依然として我々から『空』を奪ったまま、覚醒のときを待ちわびている…

そう…ディードⅡクレアルは今もこの大地で眠っているのだ……

——ルフォンⅡアッシュバート著

『青空の世界』

第一章 リオンの依頼（前書き）

長さはこれくらいでいいんでしょうか……。それではどうぞ

第一章 リオンの依頼

ここはアースヘル七国家のひとつ、ガルヴウ、七国家の中でも最も富んだこの国は、六つの国家領に囲まれて存在し、中立を守っている。

そしてそのガルヴウの中心都市ネアンクル。富んだ国と言っても貧富の差が激しく、日夜貧しい者の犯罪が絶えない。警察が機能してはいるのだがそれは名ばかりで、金をつかませば大抵の罪は不問とされた。よって貧しい者の犯罪が多いというのも頷けるのである

「デイドークレアルはまだ眠っているのである……ね…」

二人の男がネアンクルの貧民街を歩いていた。

声の主は虎縞の派手なバンダナを額に巻き、首からはゴーグルをかけ、迷彩のジャケットを着ている。

「なんでいつもこんなもん持ち歩いてるんすか？大将」

男、というより少年は口元から八重歯をちょこつと除かせて笑うと、本を投げた

「ほっとけ、あとその呼び方はやめろ」

黒髪で精悍な顔立ちをした男が本を乱暴に受け取る。表紙をはたくと、持っていたズタ袋にしまった

「すみません、んで例のヤマは受けるんですか？クルガさん？」

クルガデイス、もといクルガは古びれた建物が立ち並び、狭くなった天を見上げた。はるか高い天井がそこにある。いつもと変わらない、情緒の欠けらもない景色だ。

「ああ」

そういつてズタ袋から紙きれを取りだし、書き殴られた文字に目を通した

「わざわざそんな仕事を選ぶ必要もないでしょーに…」

バンダナの男、ティツカⅡウォルトが黄色く鋭い瞳をたたえた目を細めて、つまらなそうに呟く

「……」

クルガは黙ったまま歩調を早めた。今回訪れる地は、要塞都市メサイヤだ、メサイヤには、まだ行っていない。

「うおーい、大将ー！」

後ろからティツカが追い掛けてきた。

「それって貴族の護衛でしょ？ 貴族のくせに俺達平民に依頼してるってこたあ、絶対にワケアリっす、やめといった方がいいですよ」

クルガはピタリと足を止めた。ティツカがその大きな背中にぶつかりそうになる

「お前は どうするんだ？」

静かな声でクルガが尋ねる。その声には、あらゆる戦いを切り抜けた男がもつスゴ味を感じられた

「ああパスパス、成功率九割以上の仕事しか受けない、それが俺の信条ですからね！」ティツカはふんぞりかえり、自分の胸を親指でトントン叩いた

クルガはため息をつく、再び歩き始めた。

「そんなこと言ってお前は一件もまともに仕事をこなしたことが無いだろ」

その言葉がグサツとティツカの心に突き刺さる

「…ああはいはいそうですよ、そんなんですから亜人のくせに臆病虎とか言われるんですよ…」

ティツカはとことん卑屈になり、石ころを蹴飛ばした。垂れ下がった黄色と黒の縞模様の尻尾が力無く揺れる。

亜人というのは人とは異なった風貌をした生き物のことを指す。何十年前までは忌み嫌われていたらしいが、今となっては差別意識はあまりない、もっとも貴族達にとっては、その意識が今だに根強く残っているらしいが…

「俺はこれから依頼主のところへ行く」

それだけ言って、クルガは広場の方へ行ってしまった。

「まあ、死なんでくださいよ、大将いなくなると寂しいですから」

冗談なのか、真面目なのか…、ティツカはクルガの後ろ姿にそう呼びかけると、もときた道を帰っていった…

広場の北、マーテルの人工池のほとりにその酒場はあった。人の気
が無く、黒怨鳥がぎゃあぎゃあとけたたましい鳴き声をあげる、は
たから見ると幽霊屋敷にしか見えない

バー『スカイブルー』

いつ見ても皮肉な名だ、クルガはキイキイと軋んで揺れる看板をみ
ながら嘲笑した。

たてつけの悪い扉を押し開けると、人一人いない店内のカウンター
で老紳士が居眠りをこいている

「バツジ」

クルガがいつものように老紳士の肩を叩く、老紳士はむくりと起き
上がり、クルガの顔を確認するやいや、店の窓際の一角を指差し再
び居眠りをはじめた。

なるほど確かに奥の机に二人の人間が並んで座っている。

クルガはカウンターにいくらかの金を置き、果実酒とミルクをジョッキにつぐと、その席まで行き依頼内容が大まかに書かれた紙きれを見せ椅子を引いた。

「詳細を」

それだけ言って、果実酒とミルクの入ったジョッキを二人の前に置き、埃だらけの机を手で払う。

「この子をメサイヤまで護衛して欲しいのです…」

うつむいていた女が呟いた、年のころは20くらいだろうか、やっれているせいで、もっと年を取っているかのように見えたが、それを差し引いても充分な美貌をたたえていた。

「あんたの子どもか？」

クルガは女となりでちょこんと座っている子どもを見た、フードを目深に被っているため男か女かはわからない。

「…はい、この子の名前はセフィ、私の名前はリオン、リオンⅡグランバニルと言います…」

「グランバニル？グランバニル家か？」

クルガは思わず声を荒げて驚いた。グランバニル…ガルヴウの中でも指折りの富豪貴族だ、政治にさえ関与し、このネアンクルの統治をもまかされている。

リオンはコクリと頷いた

「そのグランバニルが何故？」

普通クルガ達の仕事は目的だけ聞いてあとはそれをこなすだけ、余計なことに首を突っ込まないというのが暗黙のルールとなっているのだが、グランバニル家とくれば話は違う

リオンはしばらく考えたが、決意を固めるとミルクをちびちびと飲んでいた我が子の頭を優しく撫でた

「セフィ、フードを取っていいわ…」

セフィと呼ばれた少女はためらいながらもフードをぽさりと取った。

「……なるほどな…」

これで概ねの事情が理解できた。

クルガはセフィを見つめた、母親と似て整った顔立ちをしているが、ただ違うのは頭から二本、小さな角が生えていることだ

「亜人だな…」

クルガにじっと見つめられていることに気付き、セフィが怯えてリオンに寄り添う。

「はい…」

リオンは悲しそうにうつむくと、ことの次第をぽつぽつと語り出した

「私が今の夫、クラウⅡグランバニルと知り合ったのはグランバニ

ル家主催の婚約の場を設けた社交会ででした…」

リオンは懐かしむようにセフィの頭を撫でると、せつなげに微笑んだ。

「あの人ったら、ほかの貴族の方達が見てらっしゃる中で、いきなりプロポーズしてきて…」

リオンはくすりと微笑むと、はっとした表情になり、頬を赤らめてうつむいた

「す、すいません！私ったら…」

「いいさ」

クルガは果実酒をすすり、呟いた

リオンはかわいらしく咳払いすると、続きを話しはじめた

「…私の家はガルヴウの中ではそれなりに裕福な貴族だったので、両家の反対もなくすんなりと結婚に結び付きました…、それから本当に幸せの日々でした、それが…この子が生まれてから…」

リオンはセフィを見つめた、しかしそれは憎しみだとか怒りだとかではない、むしろ哀れみや同情の感情が見てとれた。

「この子は悪くありません、ですが…」

「……貴族は亜人を嫌う」

「はい…」

セフィはミルクを飲み干し、口元を上品に拭いていた、幼いながらに貴族の中で生活してきた気品が感じられる

「この子はここにいたらもっとつらい目にあうでしょう、夫とも相談しました…この子を私の伯父ジュディンⅡグランバニルのいるメサイヤへ連れてゆくことを…」

リオンは齒を食いしぼり、両の拳を膝の上できつく握りしめた

なるほど、確かにメサイヤは亜人に関してネアングルよりはるかに住み心地がいいだろう。これで何故俺達平民に依頼したのかもわかった。だがひとつ気になる

「あんたは見たところ亜人ではないが、まさか旦那が亜人ってわけでもないだろう」

リオンが困った表情で答える

「はい…、お医者様にも聞いたのですが…匙を投げるばかりで…」

クルガはそれを聞くと、立ち上がりジョッキを片しはじめた

「あ、あの…」

リオンが心配そうな顔でクルガの後ろ姿を見つめる。

リオンが心配そうな顔でクルガの後ろ姿を見つめる。

「依頼は引き受ける、報償の方は成功払いでいい、いつもそうしてるんでな」

「……！よろしく願いします！どうか、どうかこの子を…」

セフィは今にも泣きそうな母親を見つめながら、その頭を撫でた

「ありがとうセフィ…あなたは本当に優しい子よ…」

リオンもセフィを抱きしめた。

「…感動しているところ悪いが、いいのか？俺みたいな平民を信用して」

クルガはホルダーから鈍色の銃を外し、布で入念に磨いている

「はい…だって、こんなに怪しい仕事なんてないもの…わざわざ依頼を受けてくれるなんてよっぽどのお人好しですわ…」

と、涙に濡れた目を指で拭いながらリオンがいたずらっぽく笑う

「……いい性格をしているな」

クルガは頭を掻きながら皮肉を込めて、そう呟いた

第一章／その1 魔女の森

「あんたは行かないんだな」

クルガはにぎわう街の出入口でラギ馬にセフィを乗せながら聞いた。

「すいません…今グランバニル家はセフィのことも含めて仕事が山積みなんです…私が夫の支えにならなければ…」

「そうか」

クルガはセフィの後ろに軽快に乗り上げ、短く承諾した。

「ごめんね…必ず迎えに行くから…」

リオンはラギ馬にちょこんと乗ったセフィを抱きしめた。セフィはそれに答えるようにコクコクと頷く。

メサイヤは街を出てヤシャ草原を抜け、グリーンウィッチの森を抜けた先にある。結構な距離がある上、あそこは野盗や獣が多い、擬似太陽が消える前には着きたい。

「行くぞ」

クルガは前に乗せたセフィに囁いたが、警戒はまだ解けていないようだ、顔を強張らせ、不安そうな顔をして母親を見ている。

「それではお願いします」リオンは深々と頭を下げ、クルガに小さな袋を手渡した

「これは？」

どうやら金貨が入っているらしい、ジャラジャラと重々しい音がする。

「路銀の足しにでもしてください、安心してください、報償のお金とは別に、個人的なお金ですから」

「それにしたって多すぎるだろう、受けとれないな」

余計な金は災いのもと、それもルールのひとつだ

「そんな…いいんです…受けとってください…」

あまりにも悲しそうな顔をするのでクルガはため息をついた

「わかった、これは預かっておく」

預かって、を強調しながら、金をズタ袋にいれ、手綱を引いた

「それじゃあな」

「……すいません…」

「……全力は尽くすつもりだ」

リオンはコクリと頷くと、眉を八の字によせ、長いスカートの裾を

ギュッと握った。何か言いたそうな雰囲気だったが、リオンはただ頷いているばかりだった

「あの…、どうか…お氣をつけて…」

吐き出された言葉には力が無く、最後の方の言葉は広場の雑踏の中に消えていってしまう。

「ああ」

リオンの過剰な心配に疑問を感じたが、我が子を案ずる親の愛情と解釈し、クルガはラギ馬を走らせた。

「本当に…本当に…すいま…せん…」

駆けて行く馬を後ろから望みながら、リオンはその場に崩れ落ち、両の手で顔を覆うと、許しを乞うように泣きはらした…

「ラギ馬ははじめてか？」

セフィははにかんだ笑みを浮かべ、コクリと頷いた。

もうヤシャ草原は半分くらいまで来たか…

クルガは上を見上げた。

どこまでも続く暗い空洞に、辺りを満遍なく照らす擬似太陽がぼつりとある。ネアンクルの街で天井しか見えなかったのは、街全体を半球型のドームが覆い被さっているからだ。その方が熱や光を貯められるため効率が良い、本来のアースヘルの天は、このようにぽっかりと開いた、広がりも、その奥も見えないばかりでかい空洞なのである。

「あの…」

セフィがここに来てはじめて口を開いた。高く愛らしい声だ

「なんだ」

「あなたにはご両親はいないのですか…？」

後ろを振り返って見上げるクルガの顔には迫力がある、セフィの声は少しばかり震えていた。

「いないな、随分前に死んだ、だがどうしてそんなことを聞く？」

セフィは悲しそうにうつむくと、やっと聞こえるような声で呟いた

「私と…同じ目をしてるから…」

「目？」

セフィが頷く

「あたしには…優しいお父さんやお母さんがいるけど…この角があ

るせいで…」

そう言って、細い髪の毛の隙間から生えた二本の角を摩った、この角だけで人間とは一線を逸している、という証明となる

「おじさんもあたしと同じ感じがするんだ…」

「……」

クルガは黙り込んだ、確かにそうかもしれない…俺は…

「あ、森が見えてきましたよ」

クルガは我に返るとラギ馬をとめた。うつそうと茂る木々が目の前に広がる、森の出入口には看板がたっていた

「グリーンウィッチか…」

確かに魔女でもできそうな森である、まだ昼間だというのには中は深淵の黒に染まっていた。

「ここからは歩きで行く、大丈夫か？」

クルガはセフィを抱え、ラギ馬から降ろすと、ラギ馬を看板につないだ。

「はい、大丈夫です…」

セフィはクルガの手を握り、勇んで頷いた。

「森は暗い、離れるな」

クルガとセフィはグリーンウィッチの森へ入っていった。

グリーンウィッチははるか昔から今の深緑生い茂る姿だったと言われている、その神がかった姿からグリーンウィッチ、深緑の魔女という名がついたらしい。実際に魔女を見たという噂が絶えないため、恐れをなして人々はあまり近寄りたがらない、メサイヤに向かうのに利用するためだけに使うルートなのである

「そろそろ消灯の時間だな…」

クルガが懷中太陽計をみながら呟く、この計測器で擬似太陽の沈む（消える）時間がわかる。クルガ一人ならすでにメサイヤに着いているところなのだが、セフィが途中で足をくじいたり、葉で腕を切ったりしたので、ゆっくりと慎重に進むしかなかった

「はぁ…はぁ…ごめん…なさい…」

息を荒げながらセフィは懸命にクルガについてきた。そろそろ体力の限界だろう

「今日はここで休む、明日の朝出発した方が良さそうだ」

と、太陽計を見た瞬間、擬似太陽がオフになったらしい、辺りが暗さを増した。

それを確認すると、クルガはセフィに水筒を渡し、薪を集め火をくべた、次に、ズタ袋から野宿の道具を手際よく出すと、あっけに取

られるセフィをよそに、どさりと敷き布の上に腰をおろした

「見せてみる」

「え？」

クルガはセフィの腕をとると、持って来た薬を塗りつけ、慣れた手つきで包帯を巻いた。

「つつ…！」

「痛むか？」

「だ、大丈夫です」

クルガは、そうかと短く呟くと、持って来た軽食を手渡し、力をつけておけ、と遠慮するセフィに食べるよう促した

「……すいません」

パチパチと音をたてて燃える炎の前で、膝を抱えながらセフィが呟く

「貴族のお嬢さんがここまでついて来れば上出来だ」

クルガは消えかけた火に薪をくべた。しかし何度来ても不気味な森だ。虫の鳴き声ひとつしない。

「今日は疲れただろう、明日は早いぞ、もう寝ろ」

そう言って毛布を投げると、セフィは慣れない手つきでそれを広げ

た。

「あの……」

セフィは頬を赤らめ、毛布で顔半分を隠しながらもじもじしている

「なんだ？」

「その…もう少し近くで寝ても良いですか…？」

セフィが言いにくそうにぼそぼそと呟く、まあ考えてみれば10歳やそこらの子どもだ、こんなところでは心細くなるのも無理はない

「好きにしろ」

クルガがぶっきらぼうに言う、セフィはいそいそとクルガに寄り添い、毛布を被った。しばらくすると、スースーと桃色の唇から呼吸がもれる。

「ふう…」

クルガはため息をつく、きつと表情を変え、静かに唸った。

「いいかげんできたらどうだ？」

森は静寂を保ったままだ

「…まあいい、だが俺は隙など見せん、人間観察が好きならネアンクルにでも行くんだな」

辺りのしげみがざわざわと揺れる。

「なんでわかった？ え？」

獣の皮を被り、鉞をかついだリーダー格の男がなりたてた。

「気づかれていないとも思っていたのか？」

次々としげみから野盗が現れる、1、2、3、4……7人か……

いずれの野盗も汚らしい笑みを浮かべ、自分達の獲物を見据えていた

「くくく、お前傭兵かなにかか？ 人殺しの目をしてるぜ？ 俺と同じな」

野盗のリーダーが下卑た笑い声をあげると、クルガはピクリと反応した

「気が変わった」

「あ？」

余裕の笑みを浮かべて野盗が睨む。

「そのまま消えれば逃がそうと思ったが、来い、少しだけ遊んでやる」

「ほざけっ！」

リーダー格の男が指示を出すと、野盗達が一斉にクルガに飛びかか

った

擬似太陽が朝の点灯を開始したらしい、少しばかり差し込む光でセフィは目を覚ました。寄り添って寝てたはずのクルガは反対を向き、どうやら朝食の準備をしているようだ

「ふぁ：おはようございます：」

セフィは目をぐしぐしやりながらクルガに言った、クルガは短く返事をするとうぬぬお茶をセフィに差し出した

「あ、ありがとうございます」

お茶をすすりながら何の気なしに自分の後ろを見て、口に含んだお茶を危うく吹き出しそうになった

「こ、これ…」

セフィの後ろには7人くらいの男が仲良くぼろきれのように山積みされていた。あーうー、とうめいているから死んではいないらしい。

「口ほどにもないってのはこういうことだな」

クルガは、ははっと笑うとセフィにスープを渡した。

「それを飲み終わったら行くぞ、そいつらみたいなやつらはうじゃ

うじゃいるからな」

セフィはわけもわからないままコクコク頷くと、もう一度野盗の山を見た、みなしたたかに殴られ、顔面は情けなく腫れて上がっている。あれ？セフィは違和感を感じた

「その…銃は使わないのですか…」

クルガのスプーンの動きがピタリと止まる。

「あ！いえ、ちょっと気になっただけで…、あの答えたくないことならいいんです！」

セフィがあわてて手を振ると、クルガは高くそびえる木々の合間を見上げ、呟いた。

「使うまでもなかった…それだけのことだ…」

クルガがその場から今にも消えてしまいそうで、セフィは思わずクルガの袖を掴んだ。

「さあ、そろそろ行こう」

「あ、はい…」

身支度を整え、道具をかたすと、二人は再び魔女の森を歩いていった

しばらく歩いてゆくと、看板が見えた、あと少しだ。

「もう少しで抜けられる」

「はぁ…はぁ…、はい…」

セフィは中腰になり、顔を真っ赤にさせて喘いでいた

クルガは小さくため息を漏らし、セフィの腕を引っ張ると、背中におぶった

「あ、あのっ！そんな！」

真っ赤な顔をさらに真っ赤にさせ、しどろもどろになりながらセフィがあわてる

「早く着きたいんでな」

クルガは相変わらずな無愛想で呟くと、積みもり積もった腐養土を踏み締め、先に進んだ

30分くらい歩いただろうか、遠くに、一際輝く森の出口が見えた。

「お待ちなさい」

ほっとするのもつかの間、どこからともなく声がする

「誰だ」

クルガはセフィを背中から降ろし、身構えた。

「私は水のミルラ…」

「私は木のローネ…」

いつのまにかクルガの目の前に二人の女が立っている、二人ともキラキラ光る祭事のような装飾品を身につけ、清らかなベールをまとっている。ミルラと名乗った女は長く青磁のような髪をなびかせ、もう一人のローネという方は薄緑色の短い髪を揺らしていた

「この先には」

「行ってはダメ」

交互に淡々と語る様子はさながら機械のようだ

お互いの顔はいずれも神秘的な魅力があり、雪のように白い肌が幻想的だ。顔の区別がつかないほど似ている、双子だろうか

「何を言っている」

クルガは二人の女を睨みつけた。ミルラとローネはそれに物おじもせずに、続ける

「万物を創造する五行がひとつ水、ミルラ」

「万物を創造する五行がひとつ木、ローネ」

クルガの質問を無視し、ぼうつと開けた二重の瞳をたたえ、呟く。
セフィはクルガの後ろに隠れていた。

「忠告はしました、ローネ」

「はい、姉さま」

二人は顔を見合わせ、再びクルガを見ると、今度は同時に喋り出す。

『あなたはどうかしら？五行のひとつ？それとも…』

途端、二人は木葉に巻かれ、それがおさまると、跡形もなく消えてしまった。

「……あれが魔女か？」

クルガは緊張を解くと、セフィを見つめた。わずかに体を震わせている

「あの…ミルラとローネって…」

おそろおそろクルガの顔をのぞきこみながら、セフィが呟く

「ああ、どっちもアースヘル七国家の名前だ」

クルガはしばらく考えたが、まるで意味がわからない、それより今はメサイヤへ行くことが先決だ

もう森の出口はすぐそこにある

第一章／その2 過去の傷

要塞都市メサイヤ…その名にそぐい、高い鉄壁がそびえ建ち、住民を守っている。

メサイヤは亜種の都市とも言われ、人口の40%が亜人である。市長の名はグレアー、彼自信が亜人であり、亜種と人間の調和をモットーに街を統治している。今回会うリオンの伯父は街の評議会に勤めているらしい、そこにセフィを送り届けばクルガの仕事は終了となる。

「うわあ、おつきいですねえ…」セフィが口をあんどり開けて鉄壁を見上げる。

「並大抵のことではびくともしないな…」

二人はメサイヤの門まで来ていた。10メートルはあるであろう門が二人を迎えた。亜人には巨人族というのもある。そのための門だ。

「身分を証明する物と持ち物を出せ」

門番のガタイのいい鼻から角が生えた亜人がむっとしてクルガを睨みつける。

クルガがズタ袋を肩から下ろそうとすると、門番はセフィの角に気付き、急に顔をほころばせた。

「君は亜人だね、ああ、やっぱりいい。亜人と仲のいい人間に悪い

やつはいないからな」

「いいのか？そんなに軽率で」

クルガはズタ袋を肩にかけ直した

「カッカッカッ、ここでは亜人に偏見を抱くこと自体間違っている。仮に人さらいだとしても商売になんかならねえさ、亜種ばかりだからな、何か犯罪がありや亜人が叩きのめしちまう」

門番は快活な笑い声を上げると、クルガとセフィを快く迎えてくれた。

街に入るとそれはもうあらゆるものでごったがえしていた。一寸先も人で見えない。

「すごい人だな…はぐれるなよ」

クルガが手を差し出したので、セフィは頬を染めてそれを握り、二人は街の中心へと向かってゆく

途中クルガは反対方向から来た人と激しく衝突してしまった。クルガの方が大きかったので、ふっとばされたのは初老の男だった。

「すまない、大丈夫か？」 「てやんでえ！どこ見て歩いてやがんだちくしょう！」

老人とは思えないほどの剣幕だ。待て、この声は

「ゲンゴのじいさんか？」

「ん？　そういうお前えはクルガじゃねえか！」

クルガは片方の手でゲンゴに手を差しのべた、ねじり鉢巻きに、抜けるように青いはっぴを腹に巻きつけたさらしの上に着ている

「かー！　相変わらずシケたツラしてやがんなア！」

「ほうっておけ」二人の笑い方は対照的だったが、そこには旧友に会えた喜びを感じられた

クルガとセフィにゲンゴを加え、三人は歩き出した。

「まさかこんなところで会うとはな…」

「お互いサマだぜ、噂じゃお前えはネアングルでなんでも屋やってるってえ聞いたが？」

ゲンゴはキセルをくわえ、プカプカと煙を吐き出した。

「ああ、今も工作中だ」

ゲンゴは眉をひそめてセフィを見た。セフィは怯えてクルガの後ろに隠れる

「このちっこいのか？」

「ああ、じいさんこの名前知ってるか？」

クルガはゲンゴに紙きれを見せた。そこにはセフィの伯父ジュデインの名が書かれている。

「あー、知ってるぞ、こいつは案外好きだぜ、なんたって亜人と人間の調和をなにより考えてるやつらのひとりだからな」

ゲンゴはジョリジョリ髭をいじった。

「見てくれが少しばかり違うから？そんな理由で差別なんて許せねえ！俺は曲がったことがでえ嫌えだからよ！」と、聞いてもいないことを語り出した。昔からこうなるとキリが無い

「場所を教えてください」

まだ語り足りないゲンゴを制して、クルガが尋ねた。

「わかったよ、ほら」

壁を台紙がわりに、受け取った紙の裏にガリガリと地図を書くと、クルガに投げた。

「助かる」

クルガはセフィの手を引き、その場所へと向かおうとした。

そのとき

「デュランダルでのことがまだ忘れられんか？」

「……………」ゲンゴが腕を組み、重々しく呟く、クルガは歩みをとめ、

ゲンゴに向き直った。

「…おそらく一生忘れることなんてできない、だから俺はこれをまだ持っている」

ホルダーから鈍色の銃を外し、手で弄んだ。

「自分への戒めのつもりか？」

ゲンゴがギロリとクルガを睨む

「ふっ、言い得て妙だな、そうなのかもしれない」

クルガは目をつむり、嘲るように笑った。

「忘れちまえ、お前は過去の鎖でダメにしちまうにや惜しい男だ」

クルガはうつむいた。

「今も…毎日夢を見るんだ…あのときの夢を…」

「……そうかよ……」

セフィは二人のやりとりについていけず、クルガに詳細を尋ねようとしたが、尋ねた瞬間何かが壊れてしまう気がして、口をつぐんだ。

「それじゃあな、俺はもう行く」

「ああ、紙に俺ん家の場所も書いといた、一緒に酒でもやろうや」

ゲンゴは猪口をくいとやる仕草を真似ると、きびすを返し、去っていった。

一方そのころ…

メサイヤの門にて、門番が警備していると、グリーンウィッチの方から物々しい様子で制服の男達がかっちに向かっているのが見えた。

「あの勲章は確か…ネアングル貴族直属衛士隊…」

門番は身構えた、あの様子、ただごとではない

「なにか御用で？」

門番はぶつちようづらで衛士隊を迎えた

「ネアンクル貴族、グランバニル家のご息女、セフィールグランバニル様が何者かによって誘拐された、ただちに門を開ける」

衛士隊の隊長らしき人物が矢継ぎ早にまくしたてる。

「許可証を提示してくださいねえ、規則なんで」

門番はおもいつきりナメた口調でうそぶいた

「ちっ…いきがるなよ亜人風情が…」

門番はその言葉に激昂した。思わず衛士隊隊長の胸倉をぐいと掴む

「お前ら貴族は俺達亜人を見下すほどえらいのか？え！？神にでもなったつもりか！」

衛士隊隊長はまったく顔色を変えず、淡々と吐き捨てた

「お前ら下等種族を見下すのに神である必要はない」

―ドオン…！！！！

「あ…ぐお…キ…サマア…！」

門番が口から血を吐き、ガクツと倒れる

「ふん、ケダモノが…」倒れた門番に唾を吐くと衛士隊はズンズンとメサイヤに進行していった

――
門の入口の方から悲鳴が聞こえた。門番がネアンクルの衛士隊に撃たれたらしい。

「グランバニルの娘を探せ！もっと死人が出るぞ！」

行きがけで叫び回る犬の亜人の男の声を聞き、クルガはその男をつかまえて、詳細を尋ねた

「なんでもグランバニル家の息女が誘拐されたらしいんだ！クソツ！ネアンクルの貴族め！亜人の命なんてゴミ以下にも思っていない！見つからぬようなら全員共犯者だとかぬかしやがる！」

話が見えない。誘拐？

「あ、あたしは……」

セフィは両手で口をおさえおろおろとしている、この様子だとセフィ自身は無関係だろう、となると。

「リオンか…、はめられたな」

クルガはあくまでも冷静に納得した。セフィは亜人だ、そのセフィを周りに認めてもらうために同情票を得ようってわけだろう。あのグランバニル家だ、それだけでセフィの扱いはある程度緩和されるはずだ、多すぎる路銀は罪悪感からだな

「さてと、どうしたもんか」

捕まればおそらく死罪、だから平民に依頼したのだ。俺から話が漏れないように

「仕方ない」

自分が逃げて、セフィだけを差し出しても、真犯人が見つからなければメサイヤはいつまでも汚名を着せられ、亜種は酷い扱いを受けるだろう。第一俺に逃げる権利などないのだ…

「行くぞ、セフィ」

「え…でも…」

セフィははじめて名前を呼ばれ、照れていたが、今はそれどころではない、幼いセフィにさえそれはわかっていた

「悪いな、依頼は未完了だ」

クルガはセフィを引っ張りながら、人の波に逆らって門の方へ進み出した

門のすぐ近くでは人だかりができていた。亜人はおそれおののき、人間は不安そうにそれを見ている。

「ちくしょう…！俺ももう年か…」

ゲンゴが頭から血を流し、石畳のとおりに臥せった。

「人間のくせに亜人を庇うのか？」

衛士隊隊長がゲンゴに銃を向ける

「人間も亜人も同じ生き物だろうがッ！てめえらはなんにもわかってないねえ！」

ゲンゴは精一杯声を振り絞り怒鳴った。衛士隊隊長は顔色ひとつ変えず、まるでそれが当然の真理のように、吐き捨てる

「わかっていないのは貴様らの方だ、人間が優れた生き物なら亜人は生き物ですらない、駆逐すべきゴミだ」

ゲンゴはギリギリと歯を食いしばった、悔しいが老いた体が自分の思う通りに動いてくれない。

「貴様も共犯者だな、誘拐の片棒を担いだ者にも射殺の許可は出ている」銃がカチリと音をたてる、ゲンゴは目をつむった

「待ちなさい」

通りの方から老いた声が聞こえた

「話を聞かせてください、犯罪をとりしまるのはそれからでも遅くないでしょう」

こちらに向かいながら静かに、威厳のある声でなだめすかすように

言う

「グレアー様…グレアー様だ！」

人だかりがざわめきたつ、グレアーと呼ばれた街の長は背中に甲羅を背負い、白んだ眉や髭をたつぷりとたくわえている。身長こそ人間の子ども程しかないものの、放つオーラが長年の経験と、思慮に富んだ人物であることを教えてくれる。

衛士隊隊長は天に向かい発砲した。ざわめきは止み、辺りは再び静寂を取り戻した

パラパラと天井の一部が剥がれ、粉が落ちてくる

「生憎だが亜人と会話する口は持ち合わせていな……」

衛士隊隊長は振り返ると言葉を詰まらせた。

グレアーは首をかしげ、衛士隊隊長を見つめた。そして気付いた

「まさかあなたは…ラウル？ラウルⅡデIFOォーですか？」

今度は衛士隊がざわめいた

「どういふことだ…？ラウル隊長が亜人と知り合い？」

「黙れ」

隊長、もといラウルが睨みをきかすと、衛士隊は一瞬にして静まった。

「お前のことなど知らん、グランバニル家のご息女を出せ」

「ラウル…、いえ、隊長殿、この街に人さらいをするような人間はいません、きっと何かの間違いでしょう…」ラウルはグレアーに銃を向けた。

「もういい、亜人などと会話した私が間違っていた」

ラウルが引き金に手をかけた瞬間、黒髪の男がグランバニル家の息女を連れ、現れた。

「狂言誘拐でここまでとはな、すまないグレアー殿とやら」

クルガはグレアーに頭を下げると、ラウルに向き直った

「セフィは連れて来た、メサイヤから引き上げてくれ」

「いい度胸をしているな、だがその亜人は空言を抜かした。よって射殺する」

ラウルは銃を振り、クルガにどくよう促した。しかしクルガはその場から動かない

「どうせ貴様は死ぬが、今ここで死にたいなら殺してやる、グランバニル家には止むをえず射殺したと言っておこう、刃向かうつもりなら銃を抜け、おとなしく殺されるなら銃を捨てろ」

ラウルは不敵に笑うと、銃をしまい、その上に手をかけた

クルガは首を振り、仕方なしに銃に手をかける

ラウルがニヤリと微笑む

次いで、懷からコインを出し空高く投げ上げた

辺りが水を張ったように緊張する。わずかに吹く風だけが音をたてる…

コインが大地に落ちた

両者銃を抜く、ところが勝負にならない。クルガが断然早い

「なに!?!」

ラウルが信じられないといった調子でうめく

クルガは引き金に力を込めた、その瞬間――

―あなたはそうやって自分を殺していくのね…

クルガの頭に一人の少女の姿がフラッシュバックした。引き金がひけない、全身が震える

―ドンッ!

「うぐっ…!」

左肩に銃弾を受け、クルガはその場に膝をついた、セフィが駆け寄る

「クルガさん!」

「来るな!」

額に汗を流しながらクルガが叫ぶ、セフィはびくつとして立ち止まった。

「はぁ…はぁ…、貴様一体何者だ…?」

ラウルは肩を上下させて独り言のように呟いた。

「まあいい、おい、こいつを連れてけ、二度と立てないようにしてからな」

ラウルは引きつった笑みを浮かべると、衛士隊に命令した。

「やめなさい」

セフィがクルガに近づいてくる衛士隊を睨んだ

衛士隊は困惑して隊長の指示を待つ

「何故ですか?この男はあなたを誘拐したのですよ?」

手をひらひらさせながら隊長が呟く

「なにかの間違いです、この者はわたくしを助けてくださいました」

「……」

クルガの肩から血がどくどくと流れる。早く治療しなくては…

「あなたがこの者を捕らえると言うのなら、わたくしはあなた達を一生許しません」

それは子どもとは思えぬほどの迫力だった。大の大人がその迫力に押し負けて、思わずあとじさる

「……セフィ様をお連れしろ…」

ラウルが命令すると、衛士隊はセフィを無理矢理抱えた

「離しなさい！」

さすがに大人の力には敵わない、セフィはいとも簡単に持ち上げられてしまった。

「クルガさんっ！」

クルガは立ち上がり、息を荒げた。

「はあ…はあ…」

その腹をラウルがおもいつきり殴る。

「クソッ！」

転がったクルガをラウルは何度も何度も蹴り回した。

蓄積される痛みでクルガの意識はふつつりと離れた

第二章 クルガの探し人（前書き）

特に区切る必要もありませんが、2章です。新キャラクターが続々出てきます

第二章　クルガの探し人

―この先に行ってはダメ

―絶対ワケアリっすよ！

そうだな…お前達の言う通りだった…

ひとりの女がこっちを見ている。恐怖も憎しみもない、真っ直ぐな目で

…あなたはそうやって自分を殺していくのね…

引き金がひけなかった…俺は…あの目に怯えていた…？

「……」

クルガは目を覚ました。ガタゴトと音がし、揺れる。どうやら馬車の中にいるらしい

「目が覚めたか？」御者台に座っていた衛士が陽気に尋ねた

「ああ…」

クルガは肩を見た、驚いたことに傷が完全に塞がっている

「ここは…？」

「ライン平原だ、もうすぐエムルエルド領に入る、暑くなってきたからな」

エムルエルド…アースヘル七国家のひとつ…工業が盛んで、鍛冶職人の聖地と呼ばれている

「よかったな、普通なら有無を言わず打ち首だが、グランバニル家のリオン様とセフィ様の温情措置によってお前は国外追放で済むんだ」

衛士は高らかに一笑した、馬車の中は御車台とは分けられていて、鉄格子がはめられている

「そうか…セフィが…」

クルガは壁に寄り掛かり、ため息をついた。

「…いつかガルヴウは出るつもりだったがこんな形になるとはな…」

クルガは目を閉じ、嘲笑した。そして鈍色に光る銃を眺めながら、

短く息を吐いた。あのあとメサイヤはどうなったのだろうか：

「質問があるならいいぞ、なにせエムルエルドだからなあ：同情するぜ：」

衛士はいかにも演技臭く語調を落とした。ガルヴウの貴族はエムルエルドが嫌っている。エムルエルド：そこは亜人の国だからだ。エムルエルドもまた人間を嫌っている。そういったわけでガルヴウとエムルエルドには国交がほとんどない、わずかに製鉄の仕事を請け負ってもらっているのみである

「メサイヤはどうなった」

ゲンゴやグレアーは大丈夫だろうか

「ま、真犯人も見つかったことだし、とりあえず解放されたよ」

「そうか：」

「おっと、着いたぜ」

扉を軋ませ、クルガは外へ出た。エムルエルドに擬似太陽は無い、エムルエルドは地中奥底にあるからだ。目の前には巨大な門がそびえたっている

「それじゃあな」

衛士はラギ馬を走らせ、広大なライン平原を帰っていった

「…さて」

じっとしていても仕方ない、クルガは門の前まで行き、門番に掛け合った、行き交う巫人の中で、クルガは明らかに浮いている

「入国したい？ダメだダメだ！人間なぞいれられるか！」

たてがみを逆立てて、門番が牙をむく

今度はセフィもない、まいったな…

とそのとき

「あれ？」

若い男の声が後ろからした。聞き覚えがある人懐っこい声だ…

「まさか大将？」

そこには金髪をぼさぼさにしたティツカが立っていた

「ティツカか？何故ここにいる？」

クルガはティツカに尋ねた

「反応薄いなく、なんでって大将を追い掛けて来たんじゃないっすか」

胸を張り、感謝しろとばかりに傲慢げな顔をする

「じゃあさっきのまさかはなんだ？」

ギクッ：

「いやあくまさか本当に生きてるとは……里帰りのついでに見つけてちょっと驚いたんで……はは……」

とどのつまり、こいつはただ単に里帰りがしたただけなのであった

「そんなことだろうと思ったがな……だが助かる……あの門番に俺が入れるよう掛け合ってくれないか？」

「え？ そんなのお安い御用っすよ」

ティツカは門番の前まで行くと、なにやらごによごとやりだした。そして折り合いがついたらしく、ブイサインをしながらクルガの元に帰ってきた

「OK、っす！」

ティツカがにひひと笑う

「すごいな、何をやったんだ？」

「あの手の亜種は誇りを刺激すると大抵のことは聞いてくれるんですよ、ついでにマタタビもあげてきましたし」

事もなげに言い放つティツカを眺めながら、クルガはため息をついた

「亜人の敵だな……お前は」

「いやだなあ、そんな褒めないでくださいよ」

ティツカは検討違いにもたいそう気をよくした

「とりあえず俺の街来ます？」

「他に行くあてもないし、ガルヴウにも帰れんしな」

「んじゃ決まりってことで！」

クルガは、スキップして門をぐるぐるティツカのあとを追って歩いた

――

――

ティツカの故郷、キラアーガはエムルエルドの地下第一層にあった。
エムルエルドは地下に行く程広くなっており、中心都市は最下層にある

「ここがお前の家か…」

家というよりそれは小屋だった。小屋の中は散らかっていて足の踏み場もない。

「まあくつろいでくださいよ」

ティツカはジャケットを脱ぎ捨て、藁束の塊に横たわった。

「……そうさせてもらおうか……しばらく休んでいないからな……」

クルガはガラクタを片付け、その場に座り込んだ

「大将には自分の故郷とかないんすか？」

「ガルヴウだ」

「ふーん」

ティツカは特に追求しなかった。頭に手をやりぼうっとしている

「両親はいないのか？」

小屋の有様を見ているととてもじゃないが親と暮らしているとは思えない

「死にましたよ、デュランダールで」

ティツカは特に気にした様子も無くうそぶいた

「そうか……」

デュランダール……アースヘル七国家でもっとも貧しい国、先の魔族撲滅戦争の被戦地……

「それより、今まで聞きませんでしたけど……」

ティツカはむくりと起き上がり、グラスに酒を注ぐとクルガに差し出し、自分は一気に飲み干した

「大将はなんでガルヴウで今の仕事をやってる…やってたんすか？」

「探しているものがある」

クルガは酒をすすりながら呟いた。

「ひょっとして女だったりして」

ティツカは冗談っぽく笑った

「そんなところだ」

「ですよー、大将が女なんて……って、え？」

ティツカは危うくグラスを落としそうになった。クルガは女とは無縁の存在だと思っていたからだ。そういう意味でもティツカはクルガを尊敬していた

「手掛かりは何も無い、だからある程度の金を稼ぎながら各地を回るこの仕事が都合が良かった」

「名前はなんて？それくらいは知ってるんでしょ？」

クルガは首を振った

「探しようが無いじゃないっすか…」

「……」

探しようが無い……、そう……生きてるかどうかってわからないのだ……

「悪いな、少し疲れてるみたいだ、しばらく寝かせてくれ」

「わかりました、俺はちょっと出掛けてきますわ」

ティツカはジャケットを脱いだままのラフな格好で小屋を出ていった。

尻尾が見えなくなったのを見届けてからクルガはズタ袋から紫色のカバーの本を取り出した

何故この本を持ち歩いているかは自分でもわからない、ただ持っている心がやすらいだ「ルフォンⅡアッシュバード……」

本の著者のところを指でなぞり、声にだして呟いてみる、ルフォン……この言葉を聞くとび頭に何かがひっかかる。

「ん？」

何度もめくってすりきれてしまったページをめくると、そこに見慣れぬページがあった

「こんなページあったか？」

いや、無かったはずだ。繰り返して読んで暗唱できるくらいまでになったのだ。間違いない

クルガは文脈を指でなぞり、続けて読んだ

『世界は五つの気で成り立っている…木、火、土、金、水の万物を創造する五行…それに私は光と闇という相反する二つのエネルギーを加え、さらなる進化の希望を見出だした…』

しかしそれがいけなかった…相反する二つの気は五行の調和を乱し……』

そこから先はくすんで読むことができない

飛ばして読むと今度は読める文字が続いていた

『水のミルラ…』

木のローネ…

火のエムルエルド…

土のジオエイトス…

金のグノーペル…

そして

光のデュランダール…

闇のガルヴウ…

私の…子ども達…』

「何なんだ…」

そういえばグリンウィッチで会ったミルラとローネ…だったか…二人の女も似たようなことを言っていた。

ミルラ、ローネ、エムルエルド、ジオエイトス、グノーペル、デュランダー、ガルヴウ…全てアースヘル七国家の国名だ…

『探しなさい』

突然声がした、グリンウィッチで聞いた、あの声だ

「姿を見せろ」

クルガはすばやく起き上がり、周囲を警戒した

『水と木と金、それに火は揃った。あとは、土、光、闇』

「何故俺なんだ」

しばらく声がとまったが、再び二重の音が響く

『それはあなたが一番知っているはず…』

「俺が…？」

『待っているわ』

そう言い残すと声は消えた。

「待て！」

クルガは見えない二人の女に向かって叫んだ

……

「…よう…いしょう…」

誰だ…

「大将！」

ティツカが心配そうな顔をしてクルガを見ている

「はあ…はあ…」

あのクルガが汗をびっしょりかいている。ティツカの心配は驚きに近かった。

「大分うなされてましたけど…」

ティツカが水を差し出す

「夢…？」

水を飲み干すと、すかさず本をめくった

「無い…」

あのページが無くなっている、やはり夢か…？

「気分転換にどうです？ 飯おごりますよ？」

「悪いな…」

クルガはティツカに案内されて、キルアーガの街に繰り出した

「おばちゃん！ ラギ馬刺しとグランガ羊の焼肉追加ね！」

厨房から威勢のいい声が返ってきた。

「うまいでしょ？ ここ気に入ってんですよ」

はむはむと肉を頬張りながらティツカが同意を求めた

「随分と混んでるな」

クルガは辺りを見回した、店は様々な亜種で、すし詰め状態だ。だが目立たないために、好都合とも言えよう

「そりゃそうっすよ、ほら、エムルエルドには擬似太陽無いでしょ？ 夜だとか朝だとかの区別がはつきりしないんすよ。しかも亜種に

よって活動してる時間も不規則ですからここはいつも混んでるんです」

水で口に含んだ物を流し込むと、ティツカは激しく咳込んだ

「おい、大丈夫か？」

「ごほっ、久しぶりに帰って来たんで懐かしくて…ごほっ、ごほっ
そんなやりとりをしていると、クルガの後ろですさまじい怒鳴り声がした

「てめ、給仕もまともにできねーのか！」

振り返ると、全長3メートルはある大男が自分の半分程度のウェイトレスに怒鳴り散らしている。パンパンに張ったズボンに料理がぶちまけられていた。

「うるっさいわね！あんたが無駄にでかい図体してるからいけないのよ！」

それに負けないくらい大声でウェイトレスの女の子がわめいた。
ツインテールに縛った滑らかな金髪が怒りでユラユラ揺れている。
一体あの体のどこからあんな声が出るのだろうか

「何ィ〜？」

大男が立ち上がる、と、天井に頭をぶつけた。あまり頭は良くないらしい

「おお俺の図体を馬鹿にするだとお!？」

「…図体って言っちゃったよ…」

冷やかな目でそれを見ながらティツカがぼそりと呟く

だがのんきなことを言ってる空気ではなさそうだ

「……」

クルガがガタツと立ち上がる

「ちよっ、ちよっと!…お人好しもいい加減にしてくださいよ!」

「……しかしな…」

「あの娘なら大丈夫ですから」

「？」

ズドン…!

痛快な音と共に女の子の華奢な拳が大男の腹に減り込む

「お…ごお…!」

大男が膝を着き、倒れそうになった、ウエイトレスの女の子は慣れた手つきでテーブルをすばやくどかし、その何も無くなった床に大

男がズシーンと倒れる

辺りを沈黙が包む…かと思いきや

「うおおお！！！！最高だぜえユーリちゃん！！！」

「結婚してくれええ！！！！」

途端に店内を包みこむ歓声が湧いた。

ユーリというらしい、ウェイトレスの女の子はスマイルで厨房に戻っていった。

「この店が繁昌する理由のひとつです」

ティツカは何事も無かったように肉汁スープをすすった

「あのむすめはなんなんだ？」

クルガも席に座り直し、巨大なパンを切りはじめた

「ユーリちゃんは巨人族とエルフのハーフなんすよ、巨人族の怪力！エルフの美貌と知性！見事にいいとこだけとったサラブレットなんです！」

ティツカはうつとりした

「ああ…あれで怪力が無かったら今すぐにも口説いてあげるのに…」

怪力はマイナスポイントらしい、ティツカにとってはだが

「まったく亜人というのは人間の物差しじゃ計りきれんな…」

クルガはため息をつき、パンにジャムを塗り付けた

「今ではファンクラブもできてるらしいっすよ？クルガさんも……」

「遠慮しておく」

ティツカの話を通り、クルガはパンを頬張った。

一通りの食事が終わると二人は店を出て、これから何をしようかと店の前で話し込んだ

「とりあえず大将の探し人でも探します？」

「しかしエムルエルドは亜人の国だからな…」

「そうっすねえ…」

とそんなことを話していると、後ろから誰かに話しかけられた

「ちょっと？そこに立たれるとお店の邪魔なんだけど」

「ああ、すまん」

振り返ると、腰に手を当て、膨れっ面したユーリが立っていた。

「ユーリちゃん、今日も綺麗だね…」

ティツカが大袈裟にひざまづき、ユーリの手を握ろうとする

「なに？あんた帰ってたの？泣き虫ティツカ」

「ぐはっ…！」

氷点下に近い言葉を浴びせられ、ティツカは吹っ飛んだ

「知り合いか？」

クルガがユーリに尋ねる

「まあ知り合いね、知ってるだけの」

ティツカが見えない剣で刺されたように痙攣した

「あれ？あんたさっきあたしが絡まれてるときに助けてくれようと

した人だよね？でも人が来るなんて珍しいなあ…」

ユーリはまじまじと上から下まで舐めるようにクルガを見つめた

「事情があつてな」

「もしかして国外追放とか？」

勘のいい娘だ、クルガは珍しく困った

「まあそんな所だ」

ユーリはにんまりと笑うと、クルガに詰め寄った

「面白そうじゃない、ちょっと話聞かせなさいよ」

「いや…」

「なんなら力づくでも聞くけど」

ユーリが腕をまくり、拳をにぎにぎとやりはじめたので、クルガは短く息を漏らした

「少しだけならな」

「決まりね！」ユーリがポンツと手を合わせて、にぱつと笑った

「じゃあ俺も！」

「あんたは来なくていいわよ」

「おぐあ！」

ユーリに殴られ、ティツカは再び吹っ飛んだ

第二章／その1 グノーペルへ

「いいのか？」

「いいのいいの♪」

ユーリはクルガと（ついでに）ティツカを自分の家に招き入れた。

「俺が言ってるのは勝手に店を抜け出して、という意味なんだが」

「ああいいのよ、あそこはただでさえ味がいいからあたしがいなくてもある程度お客さん入るし」

ユーリはチェックのクッションにぽすんと座り込むと、手でちよいちよい手前の椅子を指した、座れ、という意味だろう

ティツカというと興奮でさっきからごそごそと部屋を物色している。あとで殺されなければいいのだが…

「さ、話して」

ユーリは小首をかしげ、営業スマイルとはまた違った素の笑顔を浮かべる

「そうだな…何から話そうか…」

クルガはここまでの経過を語り始めた、無論メサイヤのことは多少オブラートに包んで…

「……すごいことになってるのね…あなた」

ユーリが真剣な顔をして頷く

「でもガルヴウの貴族達ったら相変わらずなのね!」

ユーリのパンチが空を切る、それによって巻き起こった風が、クルガの髪を揺らした

「ああ…亜種とは相いれない仲だな」

「まったく! なんでちょっと姿が違うだけで差別するのかしら?」

クルガは思わず吹き出した

「はは、俺の知り合いの人間も同じことを言ってたよ」

「そう…人間の中にもそういう人がいるのね…」しばらく二人は黙っていたいが、ややあって、

「うん、決めた!」

ユーリが膝を叩き、すくつと立ち上がる

「何をだ」

「あたしもついていくわ」

「は?」

クルガは目を丸くした。この娘の一挙一動には本当に驚かされる

「しかしお前には理由が無いだろう、まさか面白そうだからとか言うのか？」

「うん、それが半分、もう半分はちょっと気になることがあるんだ」

「気になること？」

「あなたの言っていたミルラとローネとか言った双子の女の話…」

クルガは特に問題無いだろうと思って、本の話や自分の探し人のこともユーリに話していた。

「心辺りでもあるのか？」

「ちょっとね、あたしのママがその本に書いてあることについて小さいころあたしに聞かせてくれたことがあったの、かなり昔だからよく覚えてないんだけど…」

「お前の両親はどこにいる？」

「ママはグノーペル、パパはジオエイトスに、パパは巨人族でママはエルフだから、一族の掟で家族が揃うことはあまり無いんだけどね、あ、ついでに里帰りにもなるか」

「なんでお前はエムルエルドに来たんだ？」

「亜人の国って一度行ってみたかったんだ、それに…あたしには帰る所が無いから…」

そう言って、憂いのある眼差しの視線を落とし、ぽつりと呟いた

「ハーフだからこそ…か、巨人でもエルフでもない半端な者、亜人は人間とだけでなく、亜人の中でも問題を抱えているらしい」

「じゃあ行きましょ」

「今からか？」

「だってエムルエルドでできることはもう無いじゃない、あなたの探し人も人間なんですよ？ だったらここにいる可能性は低いわ、グノーペルは人が集まる国だからもしかしたら会えるかも」

「そうか…俺はグノーペルははじめてだからな…」

ユーリが胸をどん、と叩く

「あたしに任せなさい！ あたしはグノーペル育ちだから地理に詳しいし、それにあなた旅金も無いでしょ」

こいつは一体何者だ？ エルフの知性の賜物だろうか

「というわけでしゅっぱーつ！」

ユーリはさっさと身支度を整えると、クルガを引っ張った

「え？ 何々？ 二人してどこに行くの？」

ティツカがほこしながら二人を見る、こいつは何をしていたのだろう

「ねえ、こいつは置いていかない？」

ユーリが冷ややかに呟く

「そうも行かないな、エムルエルド入国の際の恩をまだ返していない」

「あなたって案外義理堅いのね」

ユーリは感心しつつ、つかつかとティツカに歩み寄った

「え…な、何、ユーリちゃん…ぐばっ！」

巨人族の鉄拳がティツカを襲う

「事情はあとで説明するわ」

ユーリは疲れた声で、気絶したティツカを引きずっていった

「あ、そうそう」

ユーリが思い出したように呟く

「グノーペルで今度アースヘル七国家の国王と有力貴族を集めた会談があるそうよ、グノーペルからは国王と貴族のえっとなんて言ったかしら……」

ユーリは眉をよせ、額に手を当てて唸った

「そうそう、ミ〜ミ〜、あ、ミキトとか言う貴族が出るらしいわ、まあ私達にはあまり関係ないけどね〜」

「ミキト？変わった名前だな、家の名前なのか？」

「さあ、よくわからないわ」

まあ貴族というのは酔狂なやつばかりだからな、目立つ名前でもつけたいのだろう

「ガルヴウも来るのか…」

セフィはどうしているだろうか…

「ほら早く〜」

ユーリがティツカを家の外に放り投げた

「ああ」

今は自分のことだ、七国家と五行、光、闇…

それにルフオンIIアッシュバード…お前は何を望んでいるんだ…

クルガはズタ袋を背負い、ホルダーの銃を取ると構えてみた。「デユランダーでことがまだ忘れられない、か…」

そう呟くと、銃をしまい、クルガはユーリのあとを追った

部屋をノックする音がする

「入りなさい……」

両開きの大きな扉を開けて入ってきたのは、ネアングル貴族直属衛士隊長、ラウルⅡディフォーその人である

「…あなたですか…」

ラウルはただ頭を下げ、椅子の上で子猫のように丸くなるセフィを複雑な心境で見つめた

「そろそろ出発の時間ですセフィ様、クラウ様もリオン様も一階でお待ちになっておられます」

セフィは、深々と頭を下げるラウルをきつ、と睨みつける

「わかりました…支度をするので出ていってください」

「失礼します…」

ラウルはもう一度頭を下げると、きびすを返し、退出を試みたが、セフィの椅子を引く音でぴくりと振り向く

「言いましたよね、あなたを一生許さないと」

セフィは震える声でラウルと対峙した

「…わかっています、しかしグランバニル家に仕えるのが私達衛士隊の役目、たとえあなたに疎まれても、私はあなたに仕え続けます」

ラウルはそう言ってセフィの寝室を出ていった、薄暗い部屋に再び静寂が戻ってくる

「クルガさん…」

セフィは膝を抱え、爪をかむと、嗚咽を漏らしながら半透明のローブを涙の雫で濡らした…

バタン…

扉が重々しく閉じる

「これだから亜人は…」

ラウルは目頭を指でつまむと、機敏に歩いていった。

「グノーペルか…」

ラウルもグランバニル家の護衛としてグノーペルに付き添うことになる

「ふん…亜人など…滅んでしまえばいい…」ラウルは齒を食いしば

った

忘れるものか…デュランダールの魔人族め…

漆黒の憎しみを燃え上がらせ、ラウルはあの男を思い出した。打ち首にならなかったのは悔しいが、エムルエルドに追放されたのなら同じことだろう

「しかし何者だったんだあいつは…」

今だにあの敗北感が消えない、あのとき撃たれていたら死んでいたのは自分だ

「ふ…、だがやつは死んだ…今更氣にしてどうだというのだ…」ラウルは短く笑うと、頭を振り、グランバニル家頭首、クラウ||グランバニルの待つ一階に降りていった

「はい…はい…すいません…」

店の中からユーリの声が聞こえる

「大丈夫なのか？」

「うん、すんなりOKしてくれた」

さすがは名物看板娘、店での地位もある程度高いらしい

「ちょっと待ってて、食材とか分けてもらってくるから」再びユーリは店の中に入っていた

「ふわ…」

ティツカが目を覚ましたらしい、ふにゃふにゃと目を擦る

「あれ？大将、俺なんで寝てたんすか？記憶が…」

ティツカが顔をしかめつつ、頭をなでまわす

「……疲れていたんだ」

さすがのティツカでも不憫に思い、深い同情を込めて肩を叩いた

「さ、まずはエムルエルドを出ましょ」

頭の上に疑問符を浮かべるティツカをよそに、ユーリは久しぶりの里帰りに心踊らせていた

「ああ、だがグノーペルに行くにはここからミルラの国を通らないといけないな」

クルガは頭にアースヘルの地図を思い浮かべた

六つの国家はガルヴウを囲うようにしてぐるっと円を書くように並んでいる。時計の盤を想像するとわかりやすいかもしれない

グノーペルはガルヴウの北西だ、ガルヴウの南西に位置するエムル

エルドだと、西にあるミルラを通過しなければならない

「いいわ、ミルラにも行きましようよ、あなたの探しものも見つかるかも」

軽快に言い放つユーリを見て機を伺っていたティツカがようやく口をはさめた

「あの…さっきから話がまったく見えないんですけど…」

無理もない、ティツカはろくすっぽ事情を説明されていないのだ

「うるさいわね、あんたは別に来なくてもいいのよ？」

「いや、行きます行きますって」

ティツカは人形ねようにコクコクと何度も頷く。おそらく隙あらばユーリを口説き落とそうとも思っているのだろう

やめておいた方がいいのだが…

「行くぞ」

グノーペルに向かうべく、奇妙な三人組は勇ましく歩を進めた…
…のもつかの間

「おーい！」

よたよたと甲羅を背負った老人が頼りない歩調でこっちに歩いてくる

「グルアーのじいさん！なんだよ、ボケ気味なんだから家にいろっ
て言われてんだろ？」

ティツカが自分の半分の身長もない老人を見下ろした

「おお、おお、テカーやお前に渡したいものがあるんじゃないよ」

「ティツカだ！それで何だこれ？」

ティツカが受け取った物は、短いナイフだった

「代々タトル家に伝わるありがた〜いナイフじゃ、お前にやる、の
う、ティカカ」

「…ティツカ！はあ…」

ティツカはため息をついた、ずいぶんと珍しい仕草だ

「それと…クガルしゃん…？」

「…クルガだ」

「弟と、その街を守ってくれてありがとうの」

「……」

ペコリと頭を下げ、グルアー老人はよたよたと去っていった

「なんだったのかしら」

ユーリが腰に手を当てて首をかしげる

「俺は何も守ってなんかいない…」

クルガはうつむき…ぼそりと呟いた

「大将？」

ティツカがクルガの顔を覗き込む

「いや…、なんでもない…行こう」

今度こそ三人はエムルエルド入国門へ向けて、旅立ちの一步を踏み
締めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0518b/>

青空の世界～SKY OF AZURE～

2010年10月10日01時46分発行